

博士論文の審査結果の要旨

専攻	保健医療学専攻	分野	看護学
学籍番号	11S3018	院生氏名	菊池 昭江
通学キャンパス	東京青山キャンパス		
論文題目	高度な看護を実践する専門職業人に至る自律性形成モデルの構築		
審査結果 (枠で囲む)	合格		不合格

<審査結果の要旨>

研究概要：看護専門職に焦点をあて新人から高度実践看護師に至るまで職務における自律性を、どのように形成し変容していくかを質問紙調査による横断型調査を実施し、自律性測定尺度を開発した研究である。看護専門職の自律性を測定するために臨床看護師を対象として測定項目の収集と整理を行い、看護職における自律性の構造と関連要因を明らかにし、自律性測定尺度の開発を行い信頼性・妥当性を検証した。さらに看護職の自律性に影響を及ぼす要因を内的特性・外的要因との関係で明らかにし、高度実践看護師の自律性測定尺度開発も同様の研究を行った。それらの研究を統合し、臨床看護師 (Generalist) の新人から高度実践専門看護師 (CNS : Certified Nurse Specialist) に至る看護専門職の自律性形成モデルを構築した。

①目的；新人看護師から高度実践看護師の職務における自律性形成過程を尺度に基づき実証的に明らかにし、自律性形成モデルの構築を目的とする。

②研究デザイン；第Ⅰ期研究は臨床看護師 (Generalist) の自律性、第Ⅱ期研究は高度実践専門看護師 (Specialist) の自律性を実証的に明らかにし、併せてそれぞれの自律性形成過程に影響を与える内的特性として職務に対する意欲・満足度・キャリア意識など、外的要因として専門的職位・対人関係などの関連性を検討し、看護職の Generalist から Specialist に至る自律性形成モデルの構築を試みた。

③研究方法；調査期間は 1996 年 7 月から 2012 年 4 月の間、4 回にわたり無記名自記式質問紙調査で留置法を用いた横断型調査である。A-C 調査対象施設は地方自治体が運営する公立の約 600 床規模の病院である。調査協力者は各病院の看護師で、A 調査 396 名 (回収率 93.4%)、B 調査 367 名 (回収率 85.29%)、C 調査 381 名 (回収率 70.6%) であった。D 調査は、無記名自記式質問紙調査で郵送法を用いた横断型調査で、調査協力者は日本看護協会ホーム・ページ上の CNS 認定者 545 名 (回収率 38.9%) である。倫理的配慮は、倫理審査委員会の審査を受け適正な倫理的配慮がなされており、倫理的問題は認められない。

④結果；臨床看護師の自律性は 3 年・6 年・10 年を節目に段階的に形成され、高度実践専門看護師では、研究能力が 3 年・倫理調整や相談能力が 6 年を境に高まることが示された。それらの自律性形成には、職位・専門性分野の属性と意欲・満足感・キャリア意識・人間関係が関与していた。

⑤結論；看護師の自律性形成には、職務経験年数に応じた学生指導役割や研究参加、適切な人事配置、キャリア意識の高揚、良好な人間関係が重要である。CNS の自律性形成には、CNS としての職位確立や専門性を発揮する職場環境および教育訓練が必要である。

⑥本研究の新規性と価値；看護職の自律性測定尺度の開発は多くの看護研究者により引用され、研究者と同様の信頼性・妥当性を検証出来、看護管理学および看護教育学の領域で学術的に貢献している。本研究の新規性は、臨床看護師・高度実践看護師の自律性尺度開発と看護職の自律性形成モデルの構築にある、今後、高学歴化する看護職の学士看護師・専門性の異なる看護職の CNS・ナースプラクティショナーについてその自律性形成過程を検討することにより、系統的・組織的な看護教育プログラム開発への期待がもてる。

審査経過：審査会は 2 回開催し、初回審査で自律性の用語の定義の明確化、長期にわたる研究であるため研究の流れを第三者に理解し易い論文構成にする、論文中の用語に一貫性を持たせるの 3 点について修正を求めたところ適切に修正された。

口頭試問：口頭試問において適確に応答した。

以上の結果から、審査会の審査員全員は本論文が著者に博士 (看護学) の学位を授与するに十分な価値があるものと認めた。

論文審査担当者

主査 岡崎 美智子

副査 吉岡 さおり

副査 阿部 晶子